

連合艦隊解散ノ辞

二十閱月の征戦已に往事と過ぎ、我が連合艦隊は今や其の隊を結了して茲に解散する事となれり。然れども我等海軍々人の責務は決して之が為に輕減せるものにあらず、此の戦役の収果を永遠に全くし、尚益々国運の隆昌を扶持せんには、時の平戦を問はず、先ず外衛に立つべき海軍が常に其の武力を海洋に保全し、一朝緩急に應ずるの覚悟あるを要す。而して武力なる物は艦船兵器等のみにあらずして、之を活用する無形の実力にあり、百発百中の一砲能く百発一中の敵砲百門に対抗し得るを覺らば、我等軍人は主として武力を形而上に求めるべからず。近く我が海軍の勝利を得たる所以も、至尊の靈徳に頼る所多しと雖も、抑亦平素の鍊磨其の因を成し、果を戦役に結びたるものにして、若し既往を以つて將來を推すときは、征戦息むと雖も安んじて休憩す可らざるものあるを覺ゆ。惟ふに武人の一生は連綿不断の戦争にして、時の平戦に由り其の責務に輕重あるの理なし。事有れば武力を發揮し、事無ければ之を修養し、終始一貫其の本分を盡さんのみ。過去の一年有半彼の風濤と戦ひ、寒暑に抗し、屢々頑敵と對して生死の間に入出せしこと固より容易の業ならざりしも、觀ずれば是れ亦長期の一大演習にして之に参加し幾多啓発するを得たる武人の幸福比するに物無し。豈之を征戦の労苦とするに足らんや。苟も武人にして治平に偷安せんか兵備の外觀毅然たるも宛も沙上の樓閣の如く、暴風一

過忽ち崩倒するに至らん。洵に戒むべきなり。

昔者、神功皇后三韓を征服し給ひし以来、韓国は四百余年間、我が統理の下にありしも、一たび海軍の廢頻するや忽ち之を失い、又近世に入り、徳川幕府治平に狃れて、兵備を懈れば、拳国米艦数隻の應對に苦しみ、露艦亦千島樺太を覬覦するも、之と抗争すること能はざるに至れり。翻つて之を西史に見るに、十九世紀の初めに當り、ナイル及びトラファルガー等に勝ちたる英国海軍は、祖国を泰山の安きに置きたるのみならず爾來後進相襲て能く其の武力を保有し世運の進歩に後れざりしかは、今に至る迄永く其の国利を擁護し国権を伸張するを得たり。蓋し此の如き古今東西の殷鑑は爲政の然らしむるものありと雖も主として武人が治に居て亂を忘れざると否とに基ける自然の結果たらざるは無し。我等戦後の軍人は、深く此等の實例に鑑み、既有の鍊磨に加ふるに戦役の實験を以つてし、更に将来の進歩を圖りて時勢の發展に後れざるを期せざる可らず。若し夫れ常に、聖諭を奉體して、孜孜奮勵し實力の満を持して放つべき時節を待たば、庶幾くば以て永遠に護国の大任を全うする事を得ん。神明は唯平素の鍛鍊に力め戦はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授けると同時に、一勝に満足し治平に安んずる者より直に之を褫ふ。古人曰く勝つて兎の緒を締めよと。